

廿云術祭

邦光史郎

芸術祭

邦光史郎

げいじゆつさい
芸術祭

著者／^{くにみつしろう}邦光史郎 発行者／野間省一 印刷
所／東洋印刷株式会社 製本所／黒柳製本
所 発行所／株式会社講談社（検印省略）
東京都文京区音羽町3丁目19番地
電話東京（942）1111（大代表）
振替東京 3930
昭和39年10月20日 第一刷発行

¥ 340

落丁本・乱丁本はお取替えます。©Shiro Kunimitsu 1964

目次

芸術祭

7

賭けの法則

67

螺旋階段

107

魔女の槌

151

李平虹

195

あとがき

238

芸術祭

装
幀

佐
野
繁
次
郎

芸術祭

四階小会議室の窓の向うに新聞社の鳩舎があった。

道路一つを隔てているビルとビルだが、窓ぎわに腰かけていると、つい眼の前に金網を張った鳩舎がみえた。

数十羽の鳩たちは、泊り木に並んで、なんとなくくちばし喙で羽虫を探ったり、ぼんやりとねむっていたり、しきりに首を廻してあたりを眺めていたりしている。

閉じこめられた鳩たちは、しかたがないとあきらめているのか、それとも元々そういう習性なのか、行儀がよい。

近畿テレビ制作部員秋元昇は、窓枠に背を凭らせて、横顔を鳩舎に向けていた。

帰巢性という鳩の本能は、何人も人間の通信業務に奉仕するために備ったものではない。

鳩が、一つの道具と化したように、俺たちだって、演劇好きという、いわば本能のような特性を、会社にかけているのだ。

入社当時は、テレビ会社という舞台で、存分に踊ってみせようとしたものだが、いまでは演出屋という一機能に化してしまった。

乗車伝票を切ったり、鉛筆やボールペンを貰いに走ったり、控室で時間待ちしているタレントに弁当を配るのが仕事だった制作見習いの一時期を経て、丸めた台本をズボンのポケットに押し込んでうれしそうにスタジオをとび廻っていた演出助手（A・D）時代を迎え、そしてようやく、一つの番組制作を委され、数十人のスタッフやタレントたちの生殺与奪権を手中に握る演出者（D）に任命されたのだ。

六年という時間は、ふつうの人生でいえば、そんなに長いとはいえない。

けれど、アメリカの生命保険会社が、一番危険な職業として査定したものに、ジェット・パイロットとテレビ・ディレクターが入っているという程、消耗の激しい仕事なのである。

ディレクターの限界点は、三十五歳だとも、いわれている。

つまり、俺たちは消耗品なのだ。

秋元昇は、ポロシャツの胸ポケットから、ハイライトを抜き出して、火をつけた。

たえず、眼を、落着きなく周囲に投げかけ、どんな些細な現象にでも、すぐ対応できるように、身体を揺っているディレクターたち。

だが、彼らは、じっと何かを考えつづけたり、特に自分自身と対面することが、不得手で不安なのだ。たえず、何かをしていないと、身がもてないのだ。

秋元は、上席にひとり、ぼつねんと腰かけている局次長田口卯三郎の細く萎びた指先の動きに眼を留めた。

虫も殺さぬウサはんと、尊称されて、甘くみられている程温厚の士なのである。半白の頭髮、きちんと折目のある丁寧な言葉使い、時折大きな耳が、ぴくっと動くのが不気味なだけの、毒のない男。そのウサはんでさえ、こうして、一つの箱に閉じこめられると、たえずテーブルの上に、本人

でも意味の分らない謎文字を、書きつづけていなくてはならない程、いら立つのだ。

まして、平部員ともなると、二十日鼠のように、立ったり坐ったり、高笑いしたりするのは、まだ大人しいほうで、とうとう、十円玉ほどの大きさの花札をとり出して、オイチョカブをやりはじめた連中も片隅にいる。

賭けごとなら、飯抜き睡眠棚上げで、何日でもやり抜こうという男たちだった。

まるで、時計屋の店頭に並んだ、大小さまさまの時計が、それぞれの孤独な音色を、お客がいようといまいと、朝から晩まで、カッチンカッチンと刻んでいるように、この小会議室に集った制作部員たちは、騒がしく、部会の始まるのを待ちかねていた。

電話のベルが焦げつくようにちりちり鳴りつづけているが、めったなことで、受話器を取り上げようとする男はいない。

他人の電話など、どうだっていいのだ。

もしかして、自分にかかったのではないかと、胃のあたりがきゅつと詰って、急いで受話器に駆け寄るのは、新米部員だけだった。

よく、犬が人間に噛みついたのではニュースにならない、人間が犬に噛みついてこそ、はじめてニュースになるというが、テレビ・ディレクターは、眼の前で、役者が竹光の切先で眼の球をえぐられようが、脳貧血を起してぶっ倒れようが、自分が無事なら、平気で、本番を取り終えるくらいの神経の持主でなくては勤まらない。

どうせ、その時かぎり、三十分か六十分の生命なのだ。それも、停電でもすれば、それっきりの物でしかない。ブラウン管がチカチカと光って消えるは、かない番組相手に、彼らは自己を磨り減らしている。

ホイ本読み、ホイ本番、ハイお疲れさん。

余った台本を屑籠にぶち込んで、靴で押しつけ、次週の台本のカット割りを、井飯片手にやつつけて、麻雀の席にかけつける。

それでも勤まる職業なのだ。どうせ、身分は、会社が保障してくれるのだから、いい仕事をしようがしまいが、月給には関係がない。

年功序列で、ロクな番組を作らない男が、高給を食^はんで、役付きに出世して行くのを、不公平と感じるうちは、まだ若い。

秋元昇は、また鳩舎に視線を投げかけた。

だが、彼らは彼らでよい。俺は、何かがしたい。

その何かが、何であるかという具体的な目標が秋元にはあった。

けれど、それを、これだと、明らかに、言葉にして言うことが憚られた。人にしゃべってしまうと、効果が薄れるという、夢占いのように、彼は、その言葉を、他人に隠していた。

しかし、予感があった。

あれが採用されないようなら、こんな会社はおさらばしてよいと思うほど、強い自信が、その企画には裏打ちされていた。

彼は、石になったように、黙っていた。

だが、もうあのお偉ら方には、分っているのではあるまいか。彼は、ちらちらと、上席に位置している、田口局次長や、萩原、松崎、安東といった三人の副部長に、眼をやった。

「おい、アキモッちゃん、聞いたか」

半年先輩の中川鶴夫が、肥満体を椅子ごと傾けてきた。

「出口の旦那の立派なこと、夜マドのカメラ・テストを受けにきた新人のオッパイを掌で量って、目方できめたちゅうやないか。こらアカン、これは合格やちゅうて」

そんなことかと秋元は、肩を落した。

編成局長、福原信正が、いきなり、巨軀を、扉の間にねじ込んで、つかつかと入ってきたのは、そんな時だった。

いつの部会にも、めったに姿を見せたことのない局長なのである。

驚きが、一瞬の緊張を、この猥雑な部屋に流しこんだ。

制作部長小池良弘は、局長のドア・ボーイ役を勤めて、つき従った。

部員たちが、いままで待たされたのは、そのためだったのだ。

小池部長は、ぶ厚い近眼鏡の縁を、たえず指先で持ち上げながら、枯れ葦のようにやせた長身を、前かがみに折り込んで、いきなり口上を述べた。

「実は本日、本年度の芸術祭参加番組の担当者の正式決定をみましたので、局長から、発表して頂くことになりました」

まだ、一週間ほど先のことだという予測が流れていた矢先だったので、いきなり殴られたような空白が、部屋の騒音を静めさせた。

部員たちは、一とびに、あわてて、自分の洞穴に帰って、首だけ、つき出している鬼のように大人しくなった。

俺に廻ってきたらしいな。みんな、そう思っていた。

新人女優の乳房を味わうことを特権と心得ている「夜の窓」の番組担当者でさえ、芸術祭の掛声には弱いのだ。

彼らは、眼と耳に、全神経を集中して、局長の言葉待った。
一年に一度やってくる、交尾期にも似た熱い季節が、今年もまた、巡ってきたのである。

2

「江口ちゃん、そこで、アップを一発、もらいますからね」

2カメラが、軽く顎をしゃくって言っている。

そのスタジオの音が、インターホンを通じて、副調室にいる成瀬光の耳に入った。

たしかに、俺は台本のカメラ割りに、江口のアップと書き込んで、線を引いた。それは、彼女の・アクションを、聴視者に見せるためでもあり、1カメラが、次のセットへ廻りこむための時間稼ぎでもあった。

けれど、必要がないといえは、なくてもよいアップなのだ。

成瀬光は、何も俺は、ことさらに、江口杏子というタレントを、売ってやる義理もなければ義務もないと思った。

そのくせ、なんとなく彼女が気になってならなかった。

いつも、何かに気を取られているように、もう一つ気合の入らない女優。一体、やる気があるのかないのかと、首をしめて、問いただしてやりたくないほど、いらいらさせる女。けれど、本番になると、奇妙に陰影のある演技をした。

「じゃ、四十五ページの頭から、返します。3カメラ、ホールド！」

副調室のガラス窓の上に並んでいるモニターの受像機が、1カメラ、2カメラ、3カメラ、オン・エア

(放送)、と、一せいに、明るく画面を映しはじめた。

「はい、3カメラ!」

3カメラの撮っている絵が、オン・エアの受像機に映り、スイッチャーの指先が、鍵盤をさまようピアノリストのそのように切換えスイッチの盤上にひらめいた。

台本のカメラ割りに従って、成瀬の指先がぱちんと鳴り、スイッチャーの指先が、ボタンを押し、その二人を中心とする副調室の機能が作動した。演出者が、テレビ番組制作の指揮者なら、副調室はそのオペレーター室、スタジオは、実戦場ということになる。

秋元昇は、スタジオで行われているカメラ・リハ(カメラ・リハーサル)を、横眼で眺めながら、副調室に通じている暗い階段を登った。

格別どこがちがうという程の工夫はないように見えるが、あの人のカットには、厚味がある。キャリアの差だと言えば、中川鶴夫は噛みつくようにして、ラジオ上りの演出屋の体験なんて、盲腸といっしょで役に立つもんか」と反撥するが、それは、テレビしか知らない新人の劣等感が言わせる虚勢であって、制作歴十一年の体験は、馬鹿には出来ない。秋元は、成瀬光に、そうした距離のある敬意を抱いていた。

けれど、もし、それを日常の態度に示したなら、たちまち、自分も、成瀬と同じ不運な傍系の流れに、繰り入れられはしまいかという空気が、制作部内にわだかまっていたのである。

成瀬光は、出世という文字から、見離されたような男なのだ。

埃っぽいスタジオの空気を吸いなれて、人間づき合いが厭になったような男の演出ぶりを、秋元昇は、みつめていた。

「はい、カメラ、もうすこし詰めて、ぐうっと、突っ込んで、ハイ、ラスト・カット」

おびえたような女の顔が眼を見張り、十秒、二十秒とつづいて、たえがたきに女が、まばたいた。「はい結構、御苦労さん。次のカメラ・リハまで二十分間休憩しますから、その間に、ダメを出します」

インタ－ホンに声を乗せて、成瀬光は、隣りの椅子のスイッチャーを振り向いた。その視界の一隅に、自分をみつめている秋元の控え目な姿が映った。

「ねえ小岩ちゃん、あの女の顔に霧を流そうや。いいだろ。頼むよ」

早口で、スイッチャーに話しかけながら、成瀬は、立上った。

近よってきた秋元が、さし招いている。

二人は、効果用のアンペックスのそばに佇んで、向い合った。

「きまりましたよ、成瀬さん」

秋元の声が弾んでいた。

「きまったかい、『海の祭』が」

「ええ、どうやら」

相手は、すでに知っているらしい。部会に出席もしない男が、どうして、あの提案企画が採用されたと知っているのか、そこに不審があった。

「今年は、成瀬さんと、僕らしいです。お手柔らかに願います」

「そりゃいいが、今年は、しんどいよ。何しろ、うちの会社は、ラジオでこそ賞を何度も取っているが、テレビじゃ、まだ一度も受賞していない」

そのために、制作部長は、毎年のように、進退伺いを、呈出しているのだ。

「だから、今年は、辞退しようかと上層部じゃ言っていたらしいが、結局、僕に押しつけてきた」